

School Amenity

6

Vol.30/No.351
2015
VOI-X

New Face21

「ほんもの」を学ぶ場へ、中高一貫教育で新たな出発

市立札幌開成中等教育学校(北海道)

地域の思いと夢が込められた小中一貫校

野母崎小中一貫 青葉学園(長崎市立野母崎小学校・野母崎中学校:長崎県)

大阪市3校目となる施設一体型小中一貫校

いまみや小中一貫校(大阪市立新今宮小学校・今宮中学校:大阪府)

LIFE-LONG LEARNING SPACE
生涯学習空間



学校図書館をつくる ～活水中学校・高等学校～

平成23年秋、長崎にある活水中学校・高等学校に完成した5号館には、魅力的な学校図書館が整備された話題になった。計画は同校図書主任の教諭と図書館研究者による明確なビジョンによるものだという。その考え方を追ってみたい。

学校図書館移転の経緯

「知恵と生命との泉－主イエス・キリスト－に拘べよ」を建学の精神に長崎市にキャンパスを構える活水学院。校名は新約聖書ヨハネによる福音書4章14節にある「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」の永遠の命を宿す「活ける水」に由来する。学校の創立は明治12年と古く、8年後の明治20年には現在の中学校から大学にあたる教育課程を編成した。

中学校と高等学校はもともと、長崎の歴史の舞台として度々登場するオランダ坂の東山の手で大学とともにあったが、昭和26年に現在の宝栄町に移転した。浦上川沿いの高台

にあるキャンパスは川を挟んで長崎市内を見ることができ、平和公園にも近い。その活水中高が既存校舎に接続する形で新校舎（5号館）を建設することが平成21年に決定した。

同校では建設委員会を組織して計画案の検討に入ったが、図書館をこの新校舎に移転することが決まり、同校で図書主任を務める草野十四朗教諭が基本計画の作成を行うことになった。草野教諭は、施設計画には読書指導や図書館利用教育などの活用を含めたビジョン構築が必要だと考え、ひいては、同校の教育の魅力を増す機会とすることを考えた。

学校図書館を考えるとともに、そこを活用しての図書館教育について、草野教諭は読書教育の進め方、新しい学力の育成への対応、司書教諭と学校図書館の役割を考える必要

があると指摘、図書館整備計画と並行した実践も試みている。

平湯モデルの採用

草野教諭が学校図書館整備にあたって指導を受けたのは長崎で図書館づくりと子どもの本の研究所を主宰する平湯文夫氏である。平湯氏の名は、図書館家具における「平湯モデル」の考案者として図書館関係者に広く知られており、立命館小学校（京都市）や牛久市立ひたち野うしく小学校（茨城県）の学校図書館にも採用されるなど、「平湯モデル」は全国規模で普及している。

平湯氏は、「広さ」「玄関」「楽しさ」「書架」「レイアウト」の5点を挙げて学校図書館に関する問題を説明するが、草野教諭は、平湯氏の指導を仰ぐ中で、学校図書館は「誘う力



活水中学校・高等学校の学校図書館を入口付近からみる



カウンターから図書館内をみる

と「癒す力」を持ち、それを「学びにつなげる力」があると考えた。「誘う力」とは、生徒や教職員が学校図書館に立ち寄りたくなる、そして本が読みたくなる（本が誘い掛ける）力である。「癒す力」は、木製家具や曲線・暖色を用いた家具やインテリアのデザインであり、この「癒す力」が「誘う力」をより引き出すと考える。そして「学びにつなげる力」とは、「誘う力」と「癒す力」によって読書の楽しさに導かれた生徒や教職員がさらなる知的欲求を満たす本と出会うことである。こうした力をしっかりと備えるための施設整備を行うには、家具をはじめとする

様々なしつらえの基準に、収容力などの物理的機能だけでなくこれらの「力」も持つかどうか、むしろ物理的機能よりもこうした力の有無を基準とすべきと指摘している。この、施設設備が備える教育力を重要視し、その必要性を学校として認識したことが、一般的に「高価」といわれがちな平湯モデルの採用につながった（もちろんコスト削減のための工夫は種々行われている）。

新しい学校図書館の概要

では、草野教諭の考える、「誘う力」と「癒す力」を持ち、それを「学びにつなげる力」を備えた学校図書

館の具体像をみてみる。

活水中高の学校図書館は、5号館の2階にある。既存校舎の南側に増築される形で接続されているため、東西南の3方向から光の入る明るい学校図書館である。出入口は既存校舎側につくられる。この出入口とその周辺のディスプレイがまず大事で、生徒が図書館に対して歩いて来る方向に対して真正面から迎え入れるために、出入口は斜めを向いている。そして間仕切りはガラスとして中の様子が外からすべて見えるようになっている。

書架の高さが抑えられているので、反対側の壁面前の書架まですべ



活水中学校・高等学校外観。右側が新しくつくられた5号館で、その2階に学校図書館がある



出入口前。生徒は写真のように図書館に向かって斜めに向かってくる。その生徒を真正面から迎える



調べ学習エリア（理系）



調べ学習エリア（文系）

長崎などの北部九州取材して、 長崎市のW.M.ヴォーリス建築の1つ 活水女子大学本館を見て。その他

今回、旧知の九州大学客員教授との再会を含め、長崎・佐賀・福岡の北部九州の数ヶ所の学校などを取材する機会に恵まれました。また、私ごとではありますが、佐賀の有田、陶芸の故郷も多くあり、今回の出張ではその時間が取れなく訪ねることはできませんでしたが、同行者も興味があるヴォーリス建築の活水女子大学の本館を夕刻でしたが、外から見ることができました。

学校法人 活水学院本部（活水女子大学）東山手キャンパスのヴォーリス建築の本館棟は、1926年（大正15年）築、1933年（昭和8年）増築。設計者は、1917年（大正6年）までヴォーリス事務所で活躍して、その後香港で建築活動を行っていたJ.R.ヴォーゲル氏の設計によるものです。



この建物は、私達が宿泊したホテルの近く、有名なオランダ坂の急勾配の石畳を登った中程、左の石門を通って階段を上がり中庭に面しており、赤い屋根と屋根窓が特徴的です。本館棟校舎出入口は、八角形の塔体を中心にしてあり、この塔体は5階建てをなしています。T字型の校舎全体は、4階建てですが、中庭から見ると傾斜地のため、3階建てにも見えます。全体はゴシック調でもあります。

この校舎は、多くのヴォーリス建築の1つの代表例でもあります。100年近く経過しても、今なお威風堂々と長崎の高台に生き続けているのは、その点だけではないと考えています。それは、設計者W.M.ヴォーリス氏の言葉からも窺えます。「簡単な住宅から複雑で多様な目的を持った建築に至るまで、最小限の経費で最高の満足を請うために確かな努力をしてきた」、また「住宅は本来住むためのものです。同様に言えば、学校は教育的計画のための家として考案された道具です」（後略）、まさにその通りです。子ども達から若年世代、高齢者までが世代を超えて学ぶことを目的に、それを計画し、それぞれの機能を十分に果たすことができる家（校舎）でなければならないと思います。それが100年近くも、脈々と伝統を引き継ぎ、使用されている理由ではないでしょうか。これが、まさに



ヴォーリス建築の神髄であるとも考えます。

最後に、滋賀県犬上郡豊郷町の豊郷小学校のことについて、この小学校も、1937年（昭和12年）にヴォーリス建築事務所が手掛けた学校建築です。当社も確か約15年前、別件で他校を取材した折に、存続是非論で、町長リコール問題にまで発展し、町を二分することになった学校です。旧校舎は、当時としては珍しい壮麗な校舎であり、「白亜の殿堂」、「東洋一の小学校」といわれた旧校舎です。今は町の記念施設として保存されています。あの騒ぎは一体何だったのでしょうか。歴史を語ることのできる学校に限らず文化的な建物は可能であれば保存し、後世に残し、次世代の人びとに継承してゆきたいものです。



司書室前に設けられたAVブース。館内は無線LANも整っているが、隣の情報室のPCも使用する



てである。中に入ると、まず、円形テーブルに並べられた新着図書が迎えてくれるが、この出入口付近のエリアは「読書」、平湯氏の言葉を借りれば「楽しみ読み」のエリアである。特徴は書架を斜めに置いたり、書架そのものに曲線を使うなど空間そのものを楽しむしつらえとしていることである。奥は「学習」つまり「調べ学習」のエリアとして、学校図書館という一つの空間にメリハリをつけたレイアウトがされているのである。書架は傾斜しているため、人の視線を真正面から受け止めることができ、表紙を見せるディスプレイで本の表情が引き立つ。これ

らが「誘う力」。ポイントは、平湯モデルで随所に見られる「斜め」が、利用者にとって正面を向くことにあると考えられる。

もちろん、家具の多くは木製、窓の下に観葉植物を置いた円形のドーナツベンチなど「癒す力」に関わるものは、前述の「誘う力」に通じるものばかりで、ここから「癒す力」が「誘う力」を支えるということがわかる。

最後の「学びにつなげる力」である。図書館の奥まで入ったところの「調べ学習」エリアは、授業ができるくらいの広さで文系調べコーナーと理系調べコーナーがあり、それぞ

れ関連書籍を収めた書架で囲まれている。調べコーナー文系と理系に分けたのは、関連する本を近くに置くことで動線が交錯、複雑になることを防ぐためである。

もちろん、これらの力は効果的に活用することによって相乗効果を生む。草野教諭は新しい学校図書館の活用に向けて、工事中の仮図書館期から図書館の学習資源を活かした調べ学習、リソースベースラーニングを実践するなど、試みは始まっている。

図書館研究者の平湯文夫氏にはその設計思想を弊誌にて過去に連載していただいた経緯があるが、折をみて改めてそのポイントを振り返りたいと思う。

※参考

「教育活動の中核を担う学校図書館づくりをめざして」(1)～(3)草野十四郎「樟(活水・教育研究紀要)」第22～24号



窓下の湾曲型書架